

# 序 文

本書は、2006年4月より2010年3月まで4年間にわたって行われた京都大学人文科学研究所の共同研究班「中国社会主義文化の研究」（班長：石川禎浩）の研究成果報告論文集である。この共同研究班は、2006年度に人文科学研究所東方学研究部の共同研究班としてスタートしたが、2007年度以降は、同年4月に発足した人文科学研究所附属現代中国研究センターの共同研究班として運営されることになり、人間文化研究機構（大学共同利用機関法人）と京都大学との連携研究事業（現代中国地域研究京都大学拠点）の一環（研究グループ1）を担うこととなった。

人文科学研究所における中国近現代史関連の共同研究班は、1966年に発足した「辛亥革命の研究」以来、テーマを変えつつ、絶えることなく行われてきた。これら中国近現代史関連の共同研究班を長きにわたって主宰されてきた狭間直樹教授が2001年3月に定年退職されてからは、森時彦教授の主宰にかかる「中国近代化の動態構造」（1998–2003年）、同じく「20世紀中国の社会システム」研究班（2003–2008年）が隔週金曜に定例研究会を開催したが、これと並行する形で行われたのが、「中国社会主義文化の研究」班である。森教授の主宰する研究班がいずれも50名近い班員を擁し、研究報告を行う順番がなかなか回ってこないという事情もあったため、新規の研究班を別に立ち上げ、共同研究の場をより広げるというねらいがあった。そのさい、どちらかと言えば社会経済方面の検討に重点を置く森研究班にたいして、新規に発足する研究班は、文化・思想・政治関連のテーマを扱うことが望ましいと考え、「社会主義文化」というテーマが浮上したのである。

共同研究班「中国社会主義文化の研究」を発足するにあたり、この研究テーマの意図するところについて、わたしはおおよそ次のように記した。

冷戦体制の終結以後、いわゆる“社会主義の文化”は世界中で急速に風化しつつある。「中国の特色を持つ社会主義」を標榜しつつ、改革・開放政策を進める今日の中国でも、事情はさほど変わらないかに見えるが、数十年の蓄積を持つ社会主義的な文化様式やイデオロギーはなお根強く残存している。巨大な宣伝画（ポスター）や標語（スローガン）が今なお幅を利かせていることは、その最も見やすい例であろう。これに限らず、いわゆる“社会主義の文化”は、とりわけ経済面での開放が進めば進むほど、体制維持のための文化的なタガとしての役割を負わされ、一般民衆の思考様式

になお影響を与え、現体制の文化政策を方向づけ、そして中国共産党の歴史記述を強く規定しているのである。

本研究班は、こうした中国の社会主義文化の位相を、中国に社会主義思想が伝播した20世紀初頭から今日に到る百年のタイムスパンの中で、思想、文化、政治などの面から歴史学的手法によって解明しようとするものである。中国共産党について言えば、その歴史的事実の解明が目指されるだけでなく、自党の歴史が共産党自身によって如何に表現されてきたのかという歴史記述の変遷までもが組上に載せられるであろう。清末・民国における社会主義理解や1930年代の左翼文化、延安時期の文芸政策、人民共和国時期の学術領域・学術規範の再編や文学や芸術も、社会主義文化と無縁ではあり得ない以上、当然に解明すべき対象となろう。また他方で、20世紀中国における社会主義文化の展開は、同時代日本の社会主義文化の影響を受けたばかりでなく、戦後には中国学をはじめとする日本の文化史に大きな影響を与えたという文化交渉の側面も忘れてはなるまい。本共同研究班は、20世紀中国の社会主義文化の諸相を主に歴史的視点から研究することを目指している。

このねらいが果たしてどの程度達成されたかについては、本書に収める17篇の論文を読んで評価していただくよりほかないが、そのもとになった4年間計61回に及ぶ研究班例会は、いずれも中身の濃い研究報告と討議の連続であったと自負している。とりわけ、本研究所の外国人研究員（客員教授）として、楊奎松（北京大学歴史系、2007年）、桑兵（中山大学歴史系、2008年）、汪朝光（中国社会科学院近代史研究所、2009年）の三先生がそれぞれ半年間にわたって京大人文研に在任された期間は、研究班での報告・討議を、日本人が報告する場合も、すべて中国語で行うという試みを行ったが、さいわいに班員・報告者の協力を得て、常にも増して実りある例会を行うことができた。

また、本研究班が2007年度以降、現代中国研究センターの事業として、人間文化研究機構と京都大学との連携事業の研究費を得られてからは、遠方の研究者を報告者・コメンテーターとして招聘することも可能になり、関西にとどまらない研究活動の広がりを得られるようになった。4年間における正規の研究会での報告者と報告題目については、『東方学報』第80-85冊（2007年3月-2010年3月）の彙報欄に掲載されており、2007年度以降のものについては、人文科学研究所附属現代中国研究センターのホームページの関連欄（<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~rcmcc/group107.htm>）に掲げてあるので、ご覧いただきたい。2010年3月時点での研究班の班員は、本報告書に論文を執筆された17名のほかに、岩井茂樹、王雪萍、王蘭、緒形康、川尻文彦、菊池一隆、久保純太郎、佐原陽子、瀬戸宏、東洪芬、瀧田豪、竹内理樺、武上真理子、田中剛、田辺章秀、張雯、鄭楽静、中村元哉、箱田恵子、細見和弘、丸田孝志、水野直樹、水羽信男、宮内肇、村田省一、森時彦、森紀

子、山崎岳、劉守軍の諸氏である。

この研究班の定例研究会は、隔週金曜の午後2-5時に人文科学研究所本館で（2007年12月までは西館会議室で、人文研移転に伴い2008年1月からは本館セミナー室4で）開催された。かくて、現在森教授の主宰する研究班「長江流域社会の歴史景観」と交互に金曜開催としたため、人文研においては、中国近現代史関連の研究班が毎週開催されるという2001年3月までの状況を回復し、森班と合わせて、関西における中国近現代史の国際共同研究拠点という機能を持つことができた。この4年間に招聘外国人学者などの資格で来訪され、ゲストスピーカーとして報告・講演していただいた方々は、崔鳳春（広西師範大学教授）、曲曉範（東北師範大学歴史文化学院教授）、劉景嵐（東北師範大学歴史文化学院副教授）、王汎森（中央研究院歴史語言研究所所長）、陳永發（中央研究院近代史研究所所長）、Joshua Fogel（カナダ・ヨーク大学歴史学部教授）、楊瑞松（国立政治大学歴史学系助理教授）、崔佑吉（鮮文大学校国際学部副教授）、Sebastian Veg（フランス現代中国研究センター〔香港〕研究員）、関曉紅（中山大学歴史系教授）、Gotelind Müller-Saini（ハイデルベルグ大学教授）、周尚文（華東師範大学法政学院教授）、張陟遙（揚州大学政治系講師）、王萌（華東師範大学研究生）、潘光哲（中央研究院近代史研究所助理研究員）、章清（復旦大学歴史系教授）、楊福泉（雲南省社会科学院研究員）、史桂芳（首都師範大学馬克思主義教育学院教授）、Dick Stegewerns（オスロ大学人文学部副教授）、金世昊（韓南大学校師範大学教授）、趙燕平（中国社会科学院図書館副館長）、何培忠（中国社会科学院文献信息中心研究部副主任）、解莉莉（中国社会科学院国際合作局亞非処処長）、朱蔭貴（復旦大学歴史系教授）、李長莉（中国社会科学院近代史研究所研究員）、Sergey Vradiy（ロシア科学アカデミー極東支部歴史考古民族学研究所研究員）、馬駿（フランス社会科学高等研究院 [EHESS] 研究生）、徐有威（上海大学歴史系教授）、胡成（南京大学歴史系教授）、李佑新（湘潭大学毛沢東思想中心教授）、郭岱君（Kuo Tai-chun スタンフォード大学フーバー研究所研究員）の諸先生である。

本研究班を2006年4月に組織した当初、人文科学研究所における中国近現代史の専任スタッフとしては、森時彦教授とわたしの二人がいるのみであった。特にわたしは自らが班長をつとめる研究班を組織するのは初めての経験であったため、研究班の運営に周到を欠く点多かったが、2007年の現代中国研究センターの発足にあわせて、人間文化研究機構地域研究推進センター研究員の袁広泉氏が10月に着任（人文科学研究所客員准教授）、また2008年4月に小野寺史郎氏が現代中国研究センターの助教として着任されてからは、両氏のサポートを得ることができるようになり、研究活動も大いに充実した。さらに、2008年には人文研の所屋移転に伴い、新所屋四階に現代中国共同研究室、現代中国情報資料集積基地（清末・民国の新聞、新編地方志をはじめとする資料を配架）が設けられ、スタッフ・研究環境ともに大いに充実した体制で研究活動を行うことが可能となった。現

代中国共同研究室は、この間、産学官連携研究員として研究班のサポート役をつとめた韓燕麗、箱田恵子、宮原佳昭ら三氏の研究場所となっただけでなく、OD、PD、学振特別研究員（柴田陽一、島田美和）などの受け入れもおこない、今や昼も夜も研究班員の絶えることのない拠点となっている。研究班の活動がより活発になったのは、かれらを含む班員諸氏の協力のたまものである。

本書に収録した17篇の論文については、研究班メンバーの袁広泉、小野寺史郎、瀬戸宏、瀬辺啓子、高嶋航の各氏に、それぞれ専門分野に近い論文の査読をお願いした。また、小野寺氏には校正の最終チェックを担当していただいた。本書に収めるすべての論文については、本書の刊行後にそのPDF版をウェブ上に公開する予定である。本書の出版には、人間文化研究機構による地域研究推進事業（京都大学との共同事業「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」）のプロジェクト経費を使用させていただいた。人文学の基礎研究にたいする同機構のご支援にたいし、あらためて厚く御礼申し上げるとともに、このプロジェクトが今後さらに息長く継続されるよう願ってやまない。

2010年4月28日

人文科学研究所附属現代中国研究センター

石川 禎 浩